武井の
公儀ヲ以テ
禮金兵銭

楊弓射禮蓬矢抄追考目錄

一楊弓射樣之事
一道具之事 弓。附。櫜。矢 木賊。矢代箭。
一堋寸法之圖式 并ニ的下無落字
一闖乳母之事
一度刺板之圖 付串
一紋度取筭盤之圖
一度入之事
一結改之事
一不數矢同矢 付筭法
一敷矢之事
一矢數增之事
一嘉定之事 并圖
一紋之次第 并圖式
一乳母之立樣之次第 事

一乳母アル時紋之取様之事
一源平之事
一洛陽射場所付
一洛陽弓師所付
一洛陽楊弓筈師
一錐穴之事
一射扱之事 并圖
一江戸射場所付
一洛陽矢師所付
一江戸弓矢師

己上

楊弓射禮書

雒陽 今井一中 追考

○楊弓射様乃事

抑楊弓ハ射やういろくありこれいへとも。ねらひをくして射ものとなれハ。やはり矢数おほく中かとも。金貝の射ハ常住金貝ものゝ。泥書の射手常住泥書からず。席毎ニ不同あり。終ハ矢数おほく朱書もものゝ先習得ざるゆへ。能なりひかく射こむ

とゝ。常住ぞゆりく矢数おゆかることなし。他流も
ちぐ手が流といふは。先弓矢は楊弓口伝あり
一ゝ道理をもゝくゝ造れり。楊弓を射るに第一
心持なり。俗ふも散乱の心あるゝ紀い中ふことなし。
と張め氣代特ゝく。他へ心氣をうばさず。一念を
一矢一矢と大事にもゝし。一度のゝち一矢をゆるゝ
ゝるはやうゝれども。百手をかゝるはゝ大ゝるゝ遠と
なり。左の膝を的のゝとゝにむゝ也。左の膝を堺の

左のゝ八のゝとゝにむふとんをゝし。弓をゝり矢沢番ゝ
ふもんゝゝゝゝてはまみれ百手ともにおるゝ
ふをまゝし。押手のかゝ左の大指を弭の右れかゝ
うけ。左へ押出をゝうにもゝし。右れ人差指を弭のせて
矢壇をすゝし。弓と指壇とゝふ。弦り三ゝの指いうれ
ゝのにゝくゝすゝをつゝる紀ゝゝ。右れ付人これ勝手
ありといふ。先ハ親指を右れ鼻れ穴へ入ゝゝれをゝて
親指の頭をあてゝ。弓と定規ともゝし。矢沢をゝけ膝の

上ばく一さいか引はなす。すこし間とあるなく。打上て
覘かへし。的と称るなよいろくあれども。的の上ゆり下し
ゆらゆと称るなハあ[illegible]。的と堺の横木との間と
称らひ[illegible]ばしいづくと称るなとはゞ発ずして。空
なるところに称らふといふ。是大事なるひとあてく
早氣ハうけ病めく。早氣の分ハみな中らず。り
あるともなりなりと。落ばんさりくくく称るひ矢
はゞ出ごまりさる時。押手と付と張合とく教とは

ふとなるなり。一度ゟ矢四本あり。一の矢ハ
小弱りいまゞ三かあるとのそのこにく。兼来れなり。
一矢一矢を大切にして射るへし。右大際のをしへし。
分家ハ書面ゟ志るし。口授ゟ[illegible]
がらくく工夫あるへし

○道具乃事

一弓　蘇枋の目のはまりこと。節なき木にて削べし
むかふ直なる荒丸にして付て削ふ是弓が流し弓あり
はたらきハ手荒つよくひゝよ。癖出来くあらず。引五
寸五分より六寸二三分の弓人これあり。むころふとき
ぐつ曲弓あり張弓ばかりにてみまるすべし。弓は
長ハ十一束より若しくハ二尺八寸より

一弭　中はまでハ赤丸。あるひハ金鮫魚鮫にて上代包。
金銀鹿の角とかゝる。まこと唐蒔繪とかく。竪横丸飾
とせり。近代本阿弥何某此道とあり。且者に工まを
ふ。洛陽天神の厨子正阿弥といふ弓師と招き。
角弓を削り弭を下細く下地代金襴緞子にて
包ミ。上を紫丸にて縮て鶴ふまゝ丸をあり。
左乃手にてうたやゆびの押うけ有ゝ。楚古に年
数とかゝるゆゑ矢数丸あるゆゑ也。まこと中はまてハ

弓と名くむ弱く。矢を作らしめへ。矢数ほく中
の人まれなり。尚代ハ一二ヶ月射ゐ〻ひ人を矢数
おゆく中ゆ〻ゆ芝併。本一の泳伝某れ工夫にしる。
其上弓師矢師を名人物者く其心持のごとく
弓矢と製すゆへ多くべし。弓ゆ流ハ弭の上れ幅八
分下の幅七分半に作る。弭の幅ひろ弟ハ持く。
其上紙道ゆ〻ゆとまく。弭の上れ差込の弓の金物
いろく物ずさあれども。指臺れ為にあ弟。筒金

一筋入。又ハ繪様ゆれ物れ物れ下のさしみ
れ物ゆハいるゆ物ゆかるべし
一弦　琵琶乃三四の間の緒と用ゆべしまりあ〻今と
いろくれ弦あり。弦に大小あり。細れ弦ハ矢差太き
作ゆハ矢落るゆ。太れ弦を太き矢ちゆ悪敷
銀し露と入ゆ定ゆるゆ。弓ゆ流ハ露といれ
捜と物れ。いろくれ道理ゆ物。母衣の攫付ひろれ押
掛れ柏子覗込いつをひゆ。採へ。ゆ楊弓れ氣に

あれて矢ハ放ちらばあるいハ遠くとハ云ふ
ふくく桀古わるべし

一櫜　ひとしハ乃べけのうるしぬへぬ名も也ふ
き也代すべく継弓ふるり始ぬそれ人ハ袋ハけを
短くあり也さして定れるすはるすぬひ不に落つべし

一矢　ももいあへとハ長きあり短れあり。中比五分也
の矢あり。それ九寸二分三分の矢とはかり也射ふ
人あり。ひ矢ハけもきハ間ねちれ道理あるべし。間数

をそれ人生ふくく落手あり差手あり。落手ハ人
もとはひへし志れども也九寸二分と用ゆる

一矢の木　草朴　櫻　或ハ櫟の木とも用ゆ山木ハ結ふ
考へず畢竟ハ木の尋常と用ゆる

一羽　鵠と専用ゆ白鳥の君不知ひ上品かり鵠ハ
則白鳥し染羽の物ずれぬひ不ふ矢中ふと
ハ出ひし

一八代箭乃支用ゆへるれはあり。蓬矢抄の註解ふれと

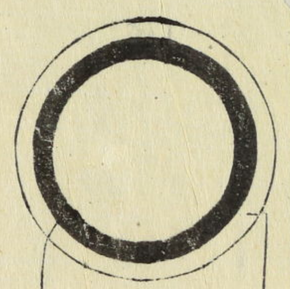
渡り給ふ。往昔天竺の悪大王と西天竺武
王と諍戦ありしに紀帯し給ふ今の矢代神頭あれし
是震旦に伝るハ。重光の明神皇帝に逆臣と退治
の給ひ。天に祈り授け給へり。本朝にハ八幡太郎義
家阿倍貞任宗任追罰の時。春日大明神へ祈誓し
まゐて。夢想に得給ひしこの弓取給へ。と
弓矢の守りとす。今爰に見ゆるハ。射手れ人数
席にゐむ。前後のあそひわり。其時に矢代箭

と面々に出て。首をとりに。後手うくさぐり
一矢づつ座に居く。さて我矢に有る者に者なり
矢の仕様ハ人のゆゑみ給ふべし
一木賊　竪に付るあり。横に付るあり。右木賊。左木賊
あり。色にはうすし又太く細きあり。はゞハ古作より
も紀なり。六分半上巻ともに九分。或ハ後功あり
落指あり緩び縮ぶあり。手人れはまゐらるべし
空に浮るべし口伝

一的　櫻藤木ようし　大さ三すうし。色も中比より三すに二分三分五分まくに造り出ること。助成奉書の紙にて強白粉とうす糊にて村のうをゆるしかりそのうを大輪と書べし大輪書ゆるしまたゆるしり三分のりて輪のゆるさ四分ならべし。或ときはさらに鬼とりふ字と書ともあり

一鬼とりふ字よりぶ号法の秘伝なれどもうをたるもと鬼とりふ字ハあるべきなり也甲乙等とりふ字を一字よりぶ号りて鬼めぶ半也吉の字むの声ゆへ如さうなるのムの字をかくべ也ぶ義ハ人い常れ鬼とりふ字となるべし可秘

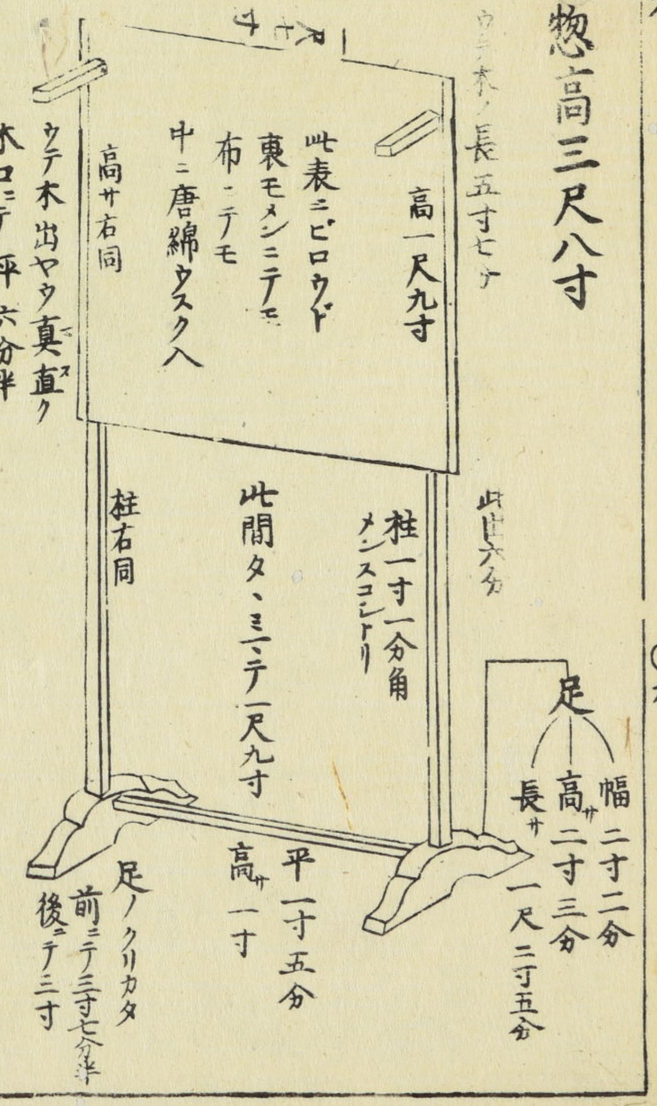
大輪之圖



一堝　高さ三尺五すこいてり。今ハ色よ三すなるくすると黒皮よ綿と入色ゑ皮のうけ一尺九す。下一尺九す合て三尺八すなり

往年堝のす法のす去御方へ手ゑ伺よ。庚申とり御書記しなり

惣高三尺八寸



右ノ外布衡六尺四方 亀ハ紬ニテモ 黒ニテモ

添書

後陽成院様の御時ノ堋ハ御時代不知 御藏より納つる古堋を御用ゐ遊ばしい由

惣高 三尺九寸 幅 二尺六七寸計

太鼓ノ内高さ幅と同位にて四角ニ相見江申候

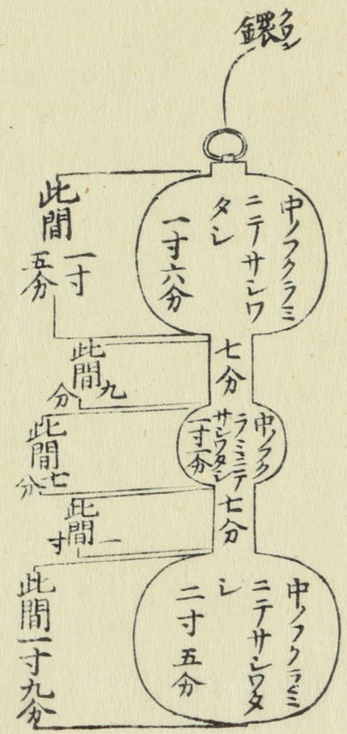
馬皮ふて張真中より貘と彩色ふ畫之候由

右高さハ相違無御座候。其外の寸法ハとくと知まを不申候由。馬皮ふくろ申いハ堋音と的の音とく

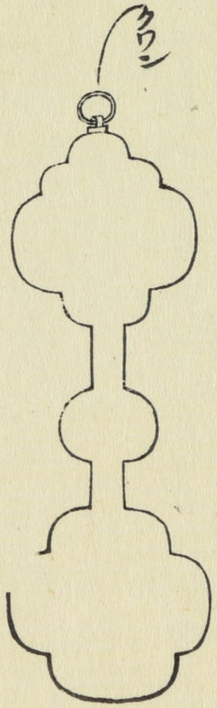
わけの爾へ申とゝのうこゝの御支ゟ可有御座ゝゝ推
量ゟ御座候由
後水尾院様御時ゟ右の堺　御改被為成高さハ古製
のごとく三尺九寸ゟ幅一尺七寸五分程にゝゝ
勅意と以て一条恵觀公ゟ金森宗和公へ伝せ
付きゝゝ。右のす法にく。其外木のふくみ。形の恰好ゝ
ずれゝから如ゝ不い様ゝゝの御事ゝく御座ゝ処ゟ右の
ゝゝゝく幅御取合不ゝ程ゟ[illegible]

そ尺七すゝゟ五分れちぐめ[illegible]
仕立ゟ被為　上候由圖を仕りそゝゝ本阿弥
無入（光叔楊弓の別号）　堺も同　御極の格ゝく[illegible]
のゝ足ハか大きゝゝ是ハ兼入ゝ簡ゝゝ
弱弓に輕き矢にく[illegible]中ゝく堺ゝの尺
ゆゝゝゝゝ。當世ハ強弓ゟ重き矢にく中ゝ
にくゝゝゝゝゝゝゝゝゝに付ゝ圖の寸法ゟ
被致ゝ。無落ハ金森公　御物ずゝハ切籠ゝゝ

瓢簞ニ兼入改ヤされいは山二色の外ハ皆ミ
後水尾院様ノ御時ニ改ヤれ格ヲ定れ座ハ
一無落　大形瓢簞ニ其外いろくわずかあり
無落圖　惣高六寸



下ノフリラミノ内ヘ
鉛ヲ二百目入ルナリ



此寸法いつれを兼れかるあり

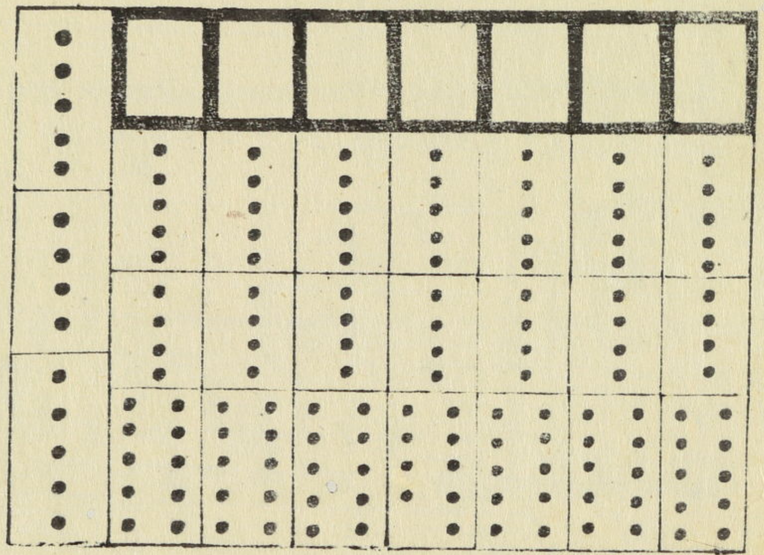
右二色兼入仕出されいと
一字の包紮　いろくあるを當世都鄙あまく
用ゆる

一闔　文字又ハ繪等あり　闔をむすびうるなり。結改といふ百手
ひら　五度ほどすび錯び改むるあり

一乳母　二人前ありいろ〳〵ハ矢二本ずつと一度として
百度射そろう。中ほどより四本と一度と拵あ五十
度ゟ定ゟ是四季と表せり
一錐穴　わそろ人ゟ括と渡とゟ穴ゟ入とい小ゟ
抽ゟ元ハ一ツわりにする射抽ハ各別し

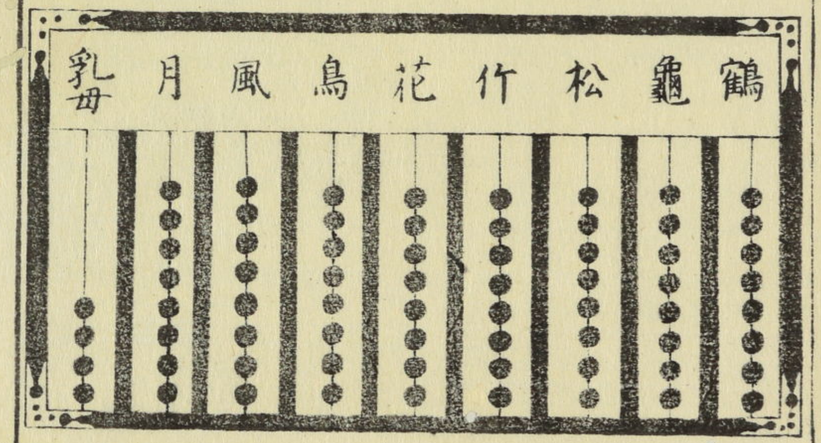
度刺板之圖

串のゟ
いろ〳〵



大躰如此
いろ〳〵物すれ

紋取算盤の之圖



紋の文字
好むこころふ
法なべし

○度入之事

一上代は一度と矢二本と定めく。百度射れども度數かぞへくして退屈出来ぬゆへ。中古より一度と矢四本と定め五十度とすりぬ

一楊弓にて中り度より入るに中つる人數多く中らざるには度より入れて射手はかどにてあらうはずり初度より入るの法は不用之。度のくゆるかくはあらてをわるずらくを度より入る是法なり。初度より矢過

といふことあり近代の私事と不用之
一矢代乃人このめずれあり但矢代ゆゑとあり
まとハ座闘なり

○結改之事

一結改ハ大前より回りしてゆくゆく結改かゝる五人ちうへの乳母ハ闘乳母
なり。ゆゑて結改ゆり納めたものあるゆゑ紋の闘二
なわるば。落　乳母といふ。そこへハ松と竹との紋わ

ゆゑば。いつまでにくを乳母といふべし。結改かゝれ時
筒あるゆゑにく。闘とあるゆゑ。筒ゆ入鳴し後ゆ二
結改目ゆ回りすしのゆを脱ゆ儀し
一回り結改ゆも回り乳母ゆもいわとあり三人の時
あるゆゑ結改ゆそにあるゆゑ初度大前れ者乳
母誰と名のまは。残ゆと二人ハ組誰くと名の分
ゆ五度ゆくゆてかゝる。但六度目ゆ十度ゆぐゆ
中乃者乳母誰と名の分。前後乃者又組誰くと

名のほう十一度目ごとに為の者乳母となり。前
二人組誰とあらためる五一度ゞ間順ゞ乳母と廻る

○不數矢の事

一一ぬと。一二ぬと。四りぬとゝふすわり矢なず
わりくわゝるれと紋のかゝるはゝ入。矢なずるはわ
そりと入らしさりゝ其座の位と見合度紋と
ゆかは役人見合是と定むるり

○同矢の事　わゝり同とく矢数すくきゝ人ハ
わゝりもゝ同ゝるもゝ

一四同。三四同ゆゝて。四の矢われて何同誰と名
乗と紀。紋は二ゆ入ゝり。三四同ハ三の矢と
も四の矢ゝもあゝり沼先同ゝるゝ

○齊矢數算法

一敷矢。一敷ゝを五十本增。二敷ゝを百本增

一同矢。四同ゝ其射手の四分一增。ゝを六四十ゝ
五十ゝゝ。八十ゝ人ハ百ゝ

一三四同ハ其射手の半分増。だゝし四十なる人ハ六十
なり。六十なる人ハ九十になるこ
一不数矢一不数。其射手ハ四分減。だゝし百なる人ハ
七十五になる。百廿なる人ハ九十になる
一一二不数ハ其射手ハ半減。だゝし百なる人ハ
五十になる。百四十なる人ハ七十よりあるこ

○敷矢之事

一そゝ人ハ百あるゝ者と五十あるゝ者と矢数各別ぬ
るゝ紋ハ一列立く置し。但矢数ハ不入
色も度紋ハ役なり。そゝの格子見合定むし
一度紋取ハ中ハ十月十月ハ誰も白ゝ有とも
五十一朱書。百一泥書。百五十一金貝と度紋取
ゝ白ふとなり但三十一と紅書。六十一と本卦なりとも土
ゝ代の形ハ不用之ヲ朱ゝ也ゝ是古来より一向あるし

○矢数増之事

一十度目もりてこを手しいつもにくを矢數一本乃違ひあるとたい誰をたれよ一乃入ひ二の入或ハ三乃入四の入らく。双方對矢よりて矢数增まもる。右もり双方對矢みれど頭ありとそ。或ハ一の入れど二つあるとも。三四も同断そもくハ二門三門射勝るとも二字ハ勝負

○嘉定之事

一一もり十六まて賀の事。大中小元の四牧の無札ハ古來の射礼ハ無礼一牧入ちしめ座乃奥ありし也。其後又一牧加へ大小と名づけ始まる。中元の無札二牧と加へ四牧なる。龍虎梅竹とも。花鳥風月とも。大小中元とも。四牧ハ書て座の奥ありて一矢數增の時。分け嘉定といわり十六牧の嘉定札四門ゑわけ紋取のまゝふみてあるぬり

嘉定圖式

大	小	中	元
裏 此面十六	裏 此面二	裏 此面十	裏 此面六
裏 此面十三	裏 此面三	裏 此面九	裏 此面五
裏 此面十五	裏 此面一	裏 此面十一	裏 此面八
裏 此面十四	裏 此面四	裏 此面十二	裏 此面七

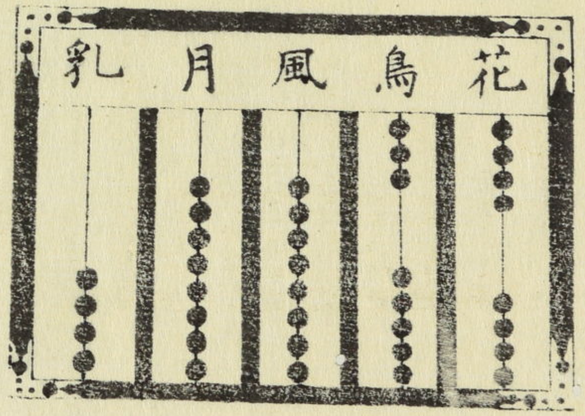
右ハ、ことゝ大小中元の無札と上よりたゞ。字掛多少相ゆ。字掛おくらひたゝ大とゝふ

中のことゝ中元の札の下と用ゆ。如何ゝ小の札し大小中元の札と定め取矢はあるこゝ札とのけ。四本ハ矢仕舞札一枚上のこゝひたゝ。文字はゞに わ色字ハ勝負すること

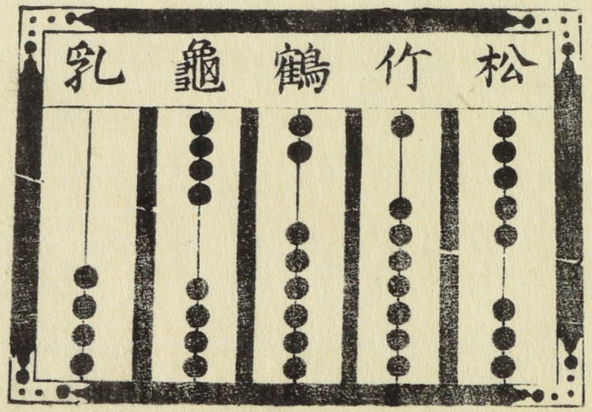
右の嘉定百手はこゝはすもれ一枚ゝりかゝくゝ ひゝゞず

○紋之次第

花は四ツ
鳥は三ツ

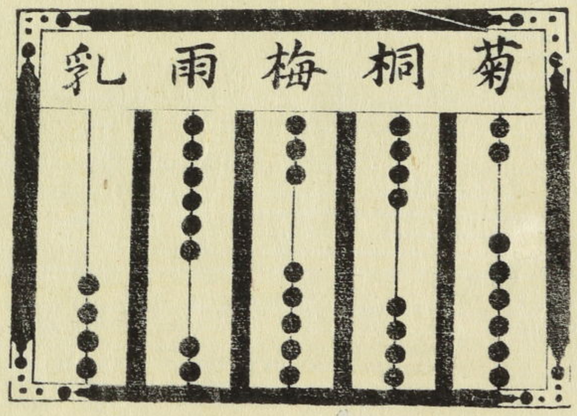


是花一ツ
鳥は三ツ
花四ツあり
風月ともに
二ツ三ツあるも
同前

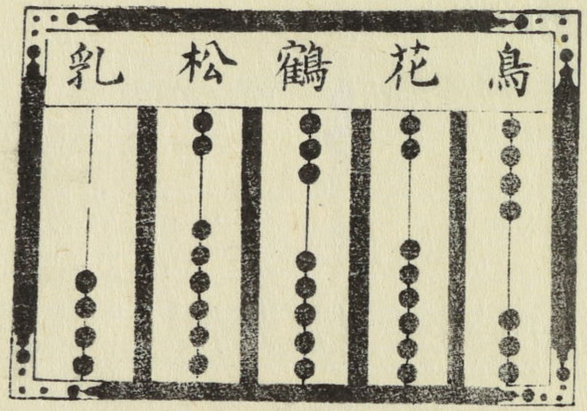


是松一ツ
右のごとく紋十露盤の
粒一本あれば一粒入
數多組のかゝへ何立
と聲をうけたまはすべし

菊ハ二ツ
桐ハ四ツ
梅ハ三ツ
雨ハ六ツ

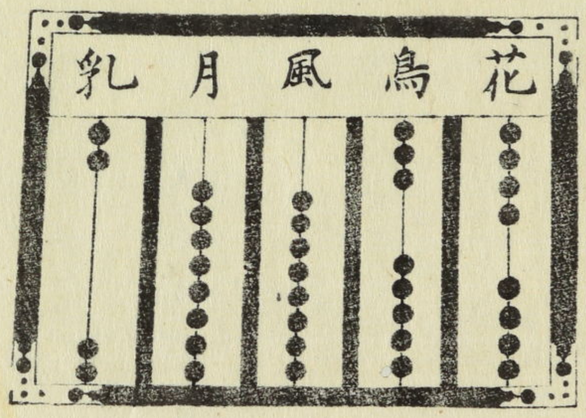


是雨二ツ
桐菊梅ハ三ツ四ツ
ありとても
ても同前

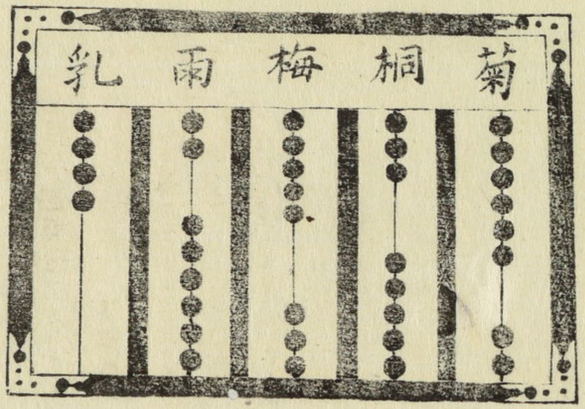


是鳥一ツ矢かとわさ
らぬ人ハ一ツ三ツすわり
其座の極ありむし大矢
わろ人ハ不數ゝ矢ぞ
ふ入ゝ矢ひハ一ツとわろ
ものとむわり

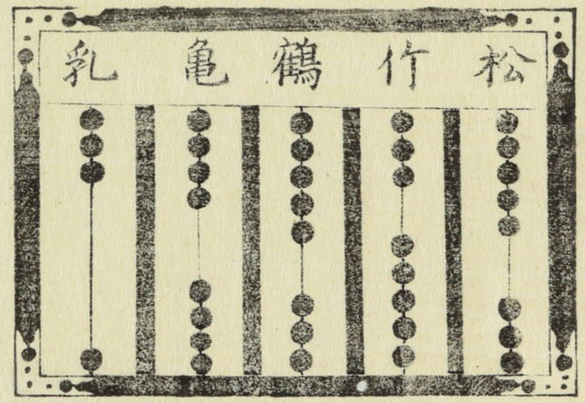
○ うちの乳母之立様之次第



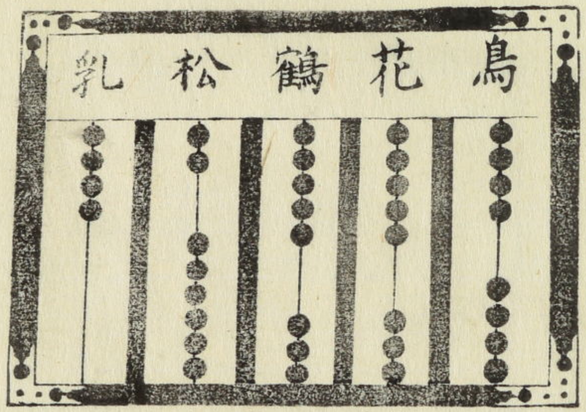
花ハ四ツ乳ハ二ツ
是花乳濃ゝいふ
乳ハ二人役ハ一本
と二本ハ立るし



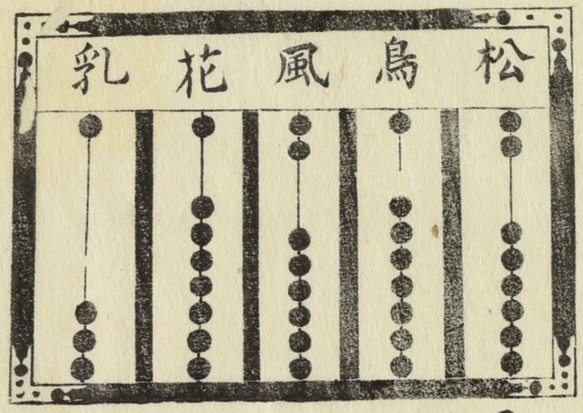
是乳一ツ
四ツ天手前
ゝふ右同前



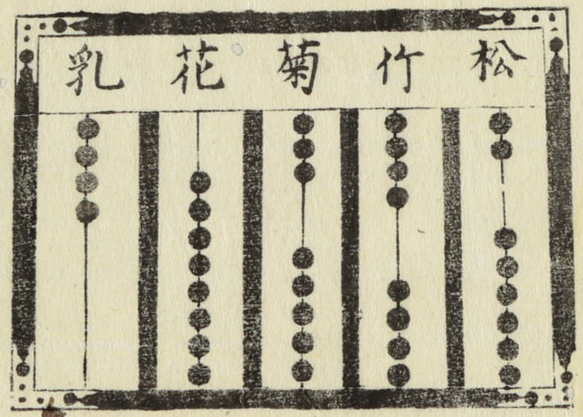
是乳一川
三川矢射のこと
いふ三川あてさば
人ハ石字不出



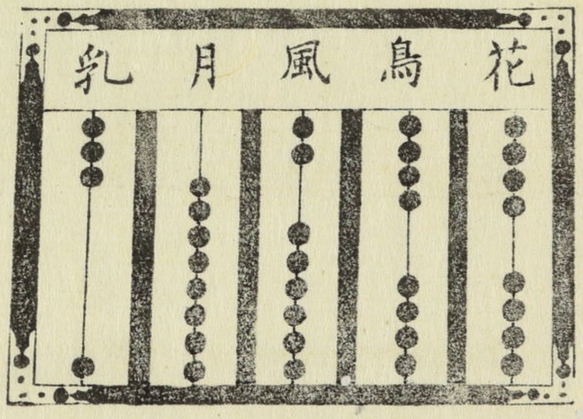
是二字一字
四川矢手前といふ
矢一本あて高人ハ石
字二字出す二本
中ふ人ハ一字いでず



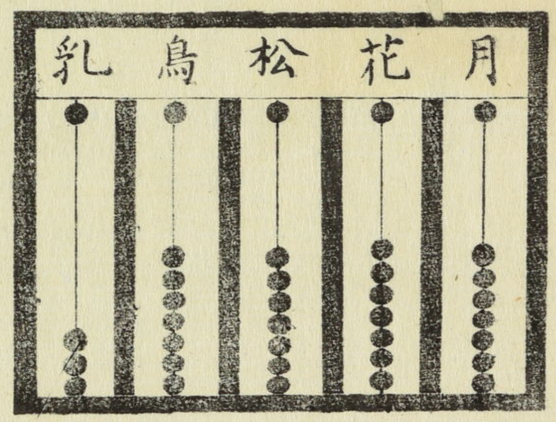
是三方滅と云ふ



是乳母惣二字と云ふ



是にくを乳母一ッ三ッ矢手前と云ふ同為



乳母一とり
一ツ矢射のき
俗よへた一とり

一乳母の矢一ツわれて紋よ二ツよ立。それゆへ石字出そうなを二人ゑ出とも。一本より四本あるも

ゆへ出るりほく石字れとりすると
一紋乃次第右よ記すとも。未熟乃方の楷
右乃字見かるくまるを
一乳母れ者の鋪二本よ立同の矢ハ四本よ立
一度紋より一ツ矢。二ツ矢。三ツ矢。四ツ矢。手前こゝ
ゝ。紋のゝれ同の矢。不数乃矢。手前乃数よ
かりゝ。右乃同鋪の者三本あれは。三乃矢
不数誰と名のる四本あれは。四乃矢も不数と

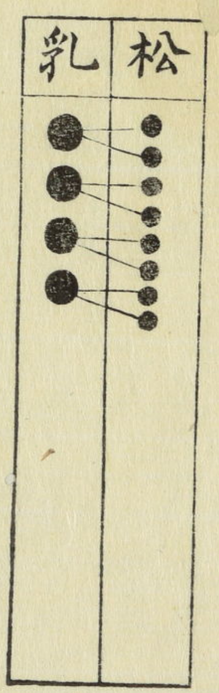
いふ。鋪どりに者四本あつれど。四ツ矢と不数弦と
いふ。同ツ矢の者を右同断。四本より無之也ふ
四ツより上ハ紋まはりなど

○乳母ある時紋の取様に事

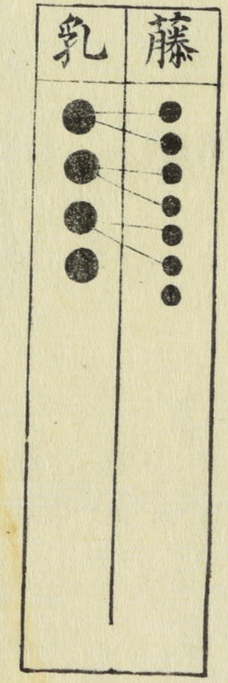
一乳母取ツ時ハ。紋のうちに中ほどに合紋取が
乳母一。三ツ矢手前。惣ま二。或ハ二字三字ずゝふ
又紋ツうちに取あれど。乳母ツうちハ紋ツうち一倍字と
なる。或ハ梅二ツふ時乳母ツに字出ずなり

松	三ツ中者ハ一字出ス 二ツ中者ハ二字出ス
竹	二字宛出ス
梅	二ツ中者ハ一字出ス 一ツ中者ハ二字出ス
藤	二字宛出ス
蔦	二字宛出ス
菊	四ツ中者ハ一字出ス 不中者ハ二字出ス
乳	

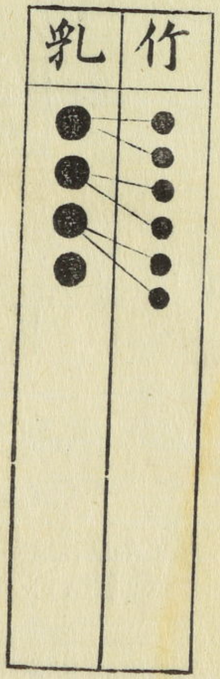
右ハ二字一字四ッ矢手前とも射の矛とも紋取り云



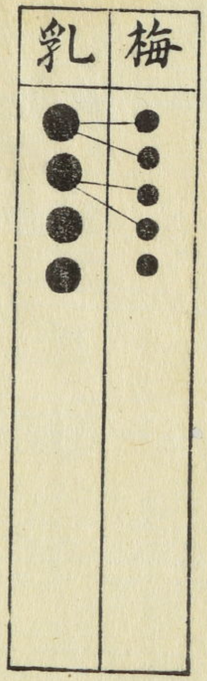
右乳母松持消



右乳母一四ッ矢手前

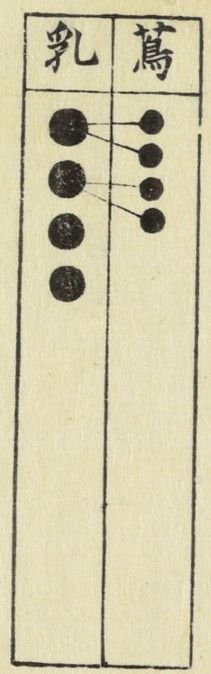


右乳母惣一四ッ矢手前



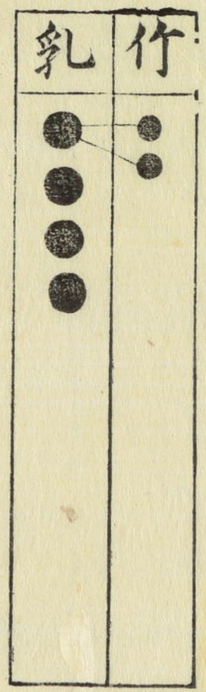
右二字一字四ッ矢手前

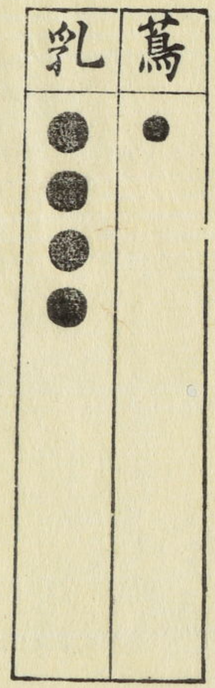
右摠二四ッ矢手前



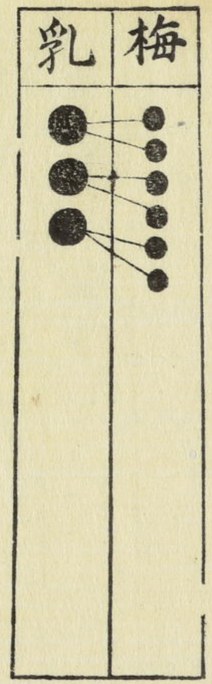
右二字三字

右惣二

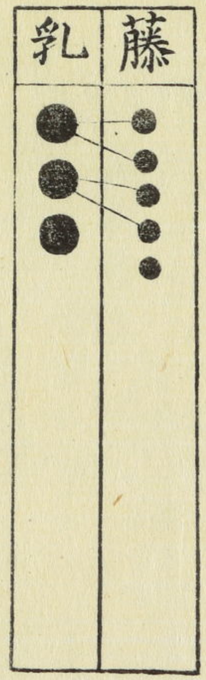




右四字三字

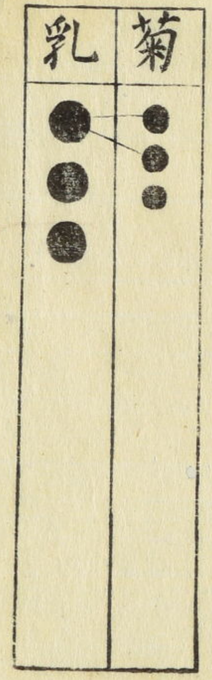


右乳母梅持消



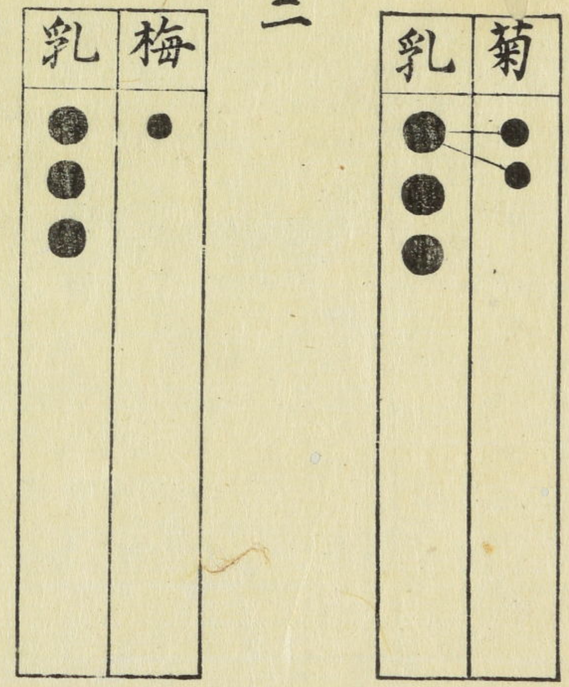
右乳母一三矢手前

右乳母惣一三ッ矢手前



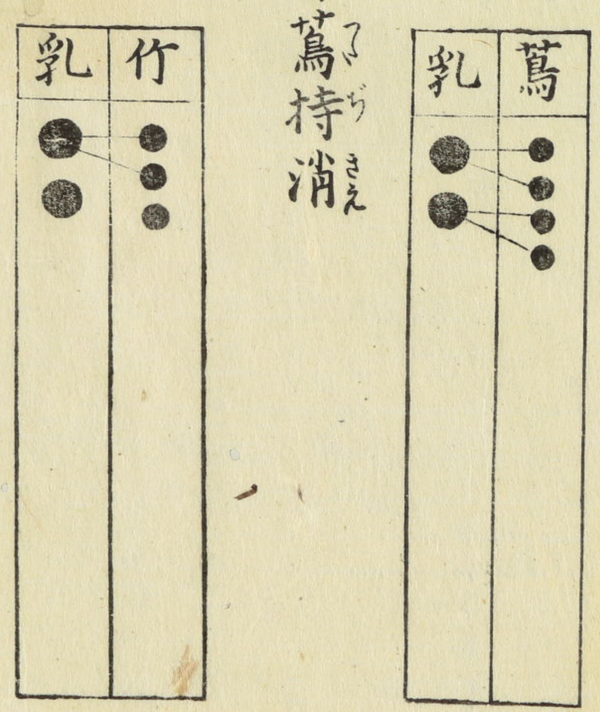
右二字一字三ッ矢手前

右惣二

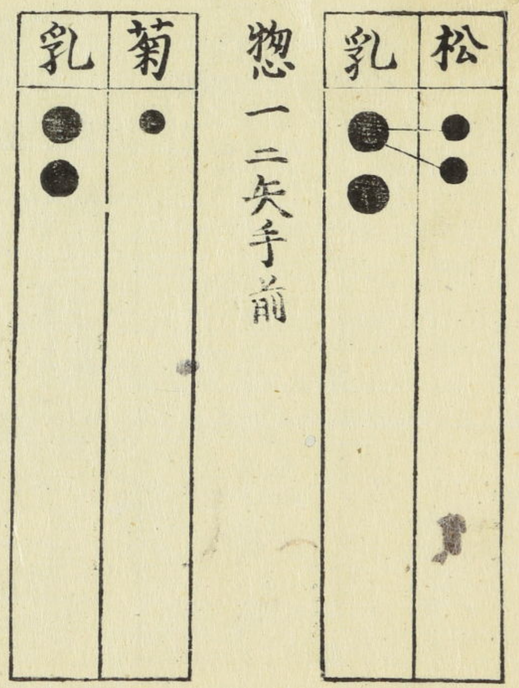


右二字三字

右乳毋蔦持消

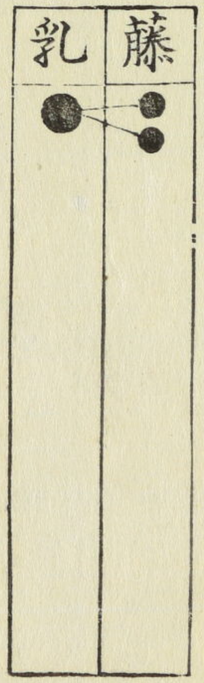


六、乳毋一二ッ矢手前

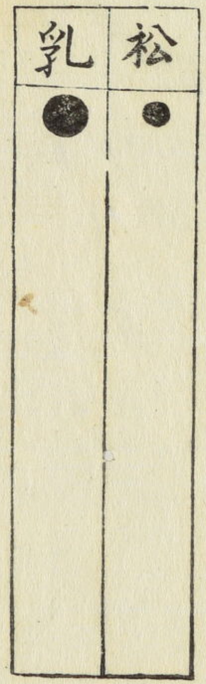


右乳母惣一二矢手前

右二字一字



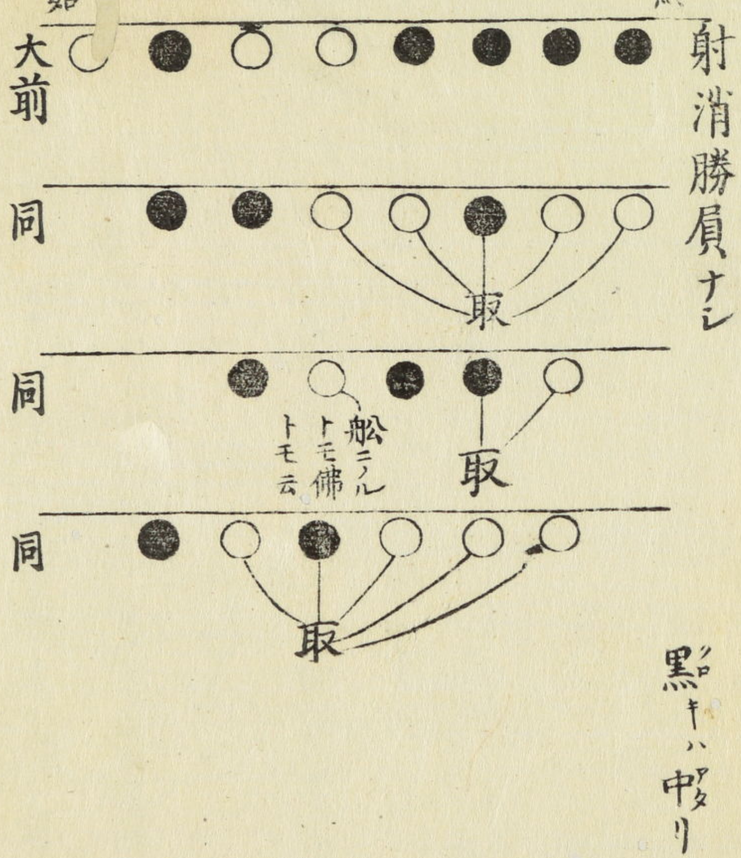
右乳母藤持消



右ゝ手一字ゝゝ。わうぢる者乃わさより一字
出のこゝり

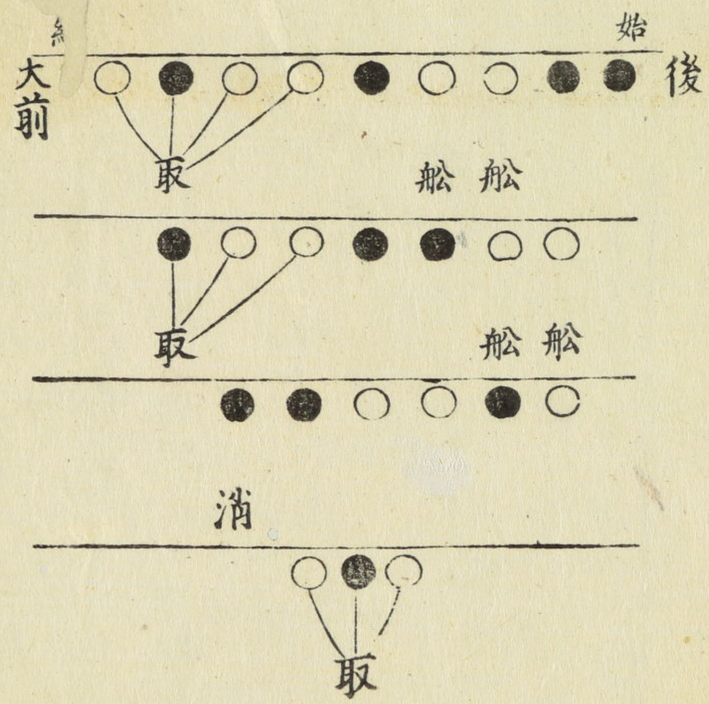
一四品改ハ四拾八度目より納(おさ)む。四十九度。五十度の両度矢通(やとおり)とりよ。四十九度目ハ大前より一
なづゝちがいくゝ
ふかくくらうておさまりよ
たまんくらくひろし五十一度目ハうしろりね
こうじゆるし
一江戸てハ五十九度目ハ大前より
ゆるし

四十九度目



船の者ハ字出す事。二字ならば勝負なり
舟洪の元ハ一字づゝ矢取ふ出ぞ事なり。五十
度目ならば一本ならば射そこなう
一矢通ずれ錐穴其座の内ぞ先にならあるべし
十字あるべし二十字の勝負なり

五十度目



一矢通ハ何度ニ成ん入ます。射消の矢あるこゝ紀
其ゝ取乃わたらされ者を船ゝそ字不出。五十度目
を射消乃矢の後のわたらされ者船ゝく字いさ
さず矢通みわたり時を一乃矢誰。一乃矢まれと
度取へるなり

○錐穴之事

一百手乃うちにわり何を十字ゝく遣ゝと。射手矢
取と二川ふゝけ取ゝを。三川ふゝけ紋取ゝを

たゝかゝす。射扱嘉定源平乃時ハ錐穴ハ二十字
充。但し源平れ錐矢字味方ハ不出。錐矢乃節
脇乃わたりにく扱ふゝわり。錐と聲かけゝ時ハ
錐穴ゝ立ゝり。束穴ゝく一二と錐穴ある時ハ。一ハ
右乃字の勝員。二を百字と二三と續れゝ錐矢
束穴ゝれゝ。三四とたゝれゝ錐。右同じ束穴し

○源平之事

一紋取嘉定札をゝく茅つと合せかゝるし。但し二十

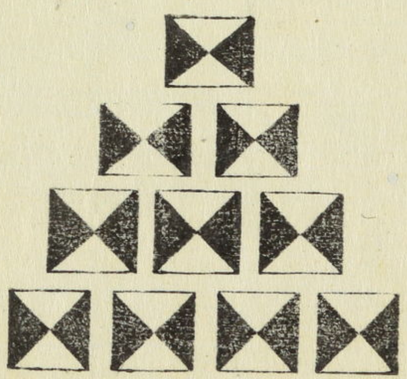
牧の札にくも又々無札四牧ゆゑ。十六枚にくも双
方定め次第白黒乃石二ツよりけ両方乃札の脇ゟ
置し。源平乃矢ゟりハ人數又ハ中つゝ位と見合
双方對様ゟりけ。掛字ハ一人ゟく二十字三十字
しくもかゝりし。人ゟき方いくも字を両方同じ
様ゟ出さし。毎人ハ白乃方三人ゟく六十字ゟ出せは
黒乃方二人くも六十字ゟ出さいつまくを初手乃
ゟりけ方白ゟかりし。白黒乃ゟち石しくわけ様

ゟり両方差引殘り石乃ゟずりと札とひくゝ文字
と改め字を引し。譬ハ札かゝくゟりくゟも文字
ゟきくとゟり。毎方同し矢数ゟくハ況れ度ゟ中
つゝ。札躍ゟりくとゟり。中つゝ躍ゟり名ゞ中つゝ
と一倍ゟくと。札躍ゟれゞれ乃文字一倍ゟくゟ字を
引ゟし

○射扱之事

一二之矢誰。三之矢誰。と名乗て二字宛乃勝負し

一相すりも矢嘉定もいと。如此字とのべ。一二三四乃中つまにくく互る差引一乃矢八一字。二八二字。三八三字。四八四字乃勝負なり



一洛陽并江戸乃射場乃所付と記とす若八田舎より楊弓とんがけ。席より望む人かけ且又楊弓興隆なれば弓師矢師の本名所付まぐ記と

○洛陽射場所付

○上京大峯之厨子　祐清

○粉川通下立賣下ル町　伏見屋五郎右衛門　慶有

○白川通願寺下ル町　蠟燭屋甚兵衛　延長

○西川院通生洲町　松屋利兵衛　松利

○車屋町通御池下ル町　丸屋源右衛門
○佛光寺東町　亀屋市郎兵衛　為久

○江戸射場所付

○橋町二町目　鈴木三意一計
○湯嶋天神之門前　柏屋甚兵衛
此外所々ニ雖有之打出而之射場ニアラス故ニ不記

○洛陽弓師

○室町通一條上ル町　琴屋今井長門
○上京天神之厨子　正阿彌長左衛門正長
○四条立賣高倉東江入町　荒井孫左衛門忠良
○白山通四条上ル町　吉田左兵衛定廣

○洛陽矢師

○[illegible]町通下御靈之前　小倉出羽掾中親

○行幸町通姉小路上ル町　嶋村平十郎　貞道
○四条通長刀鉾之町　田村八郎四郎　由治
○四条立賣富小路東江入町　柴田九郎兵衛　定景

○洛陽楊弓的并宮師

○御幸町通五条上ル町　玉屋　六兵衛　宗房
○四条立賣柳馬場西江入町　笠屋　右兵衛　定清
○室町通今出川上ル町　清兵衛

○江戸弓矢師

○湯嶋天神門前　深谷源太郎
○同所　同　久左衛門
○湯嶋妻戀町　同　勘左衛門

貞享五龍集戊辰林鐘下幹日
雒陽之産今井一中滝筆于江府
客舍

楊弓射禮蓬矢抄追考終

貞享五戊辰年七月朔日

大坂心齋橋順慶町

書林　渋川清右衛門

アフ
本